



TITLE:

<紹介>岡田俊裕編・解説『日本の
地理学文献選集』Ⅰ・Ⅱ(全十七巻)

AUTHOR(S):

柴田, 陽一

CITATION:

柴田, 陽一. <紹介>岡田俊裕編・解説『日本の地理学文献選集』Ⅰ・Ⅱ(全十七巻). 史林 2008, 91(2): 154-155

ISSUE DATE:

2008

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/154845>

RIGHT:

紹介

岡田俊裕編・解説

『日本の地理学文献選集』Ⅰ・Ⅱ

(全十七巻)

このたび、これまで日本地理学史研究を精力的に進めてきた高知大学教授岡田俊裕氏により、明治・大正期における地理学関係主要文献が編集・復刻され、『日本の地理学文献選集』としてクレス出版より刊行された。同出版社は、「学術研究に必要な貴重かつ入手しにくい資料や文献を皆様に提供」することをその趣旨とするというが、本選集の出版は地理学界からみても、おおいに歓迎すべきものである。

本選集の収録範囲は、小川琢治(Ⅰ―第五巻、Ⅱ―第二巻)、山崎直方(Ⅰ―四、Ⅱ―一)ら、地理学プロパーの学者の著作はもちろんのこと、河田 鰲、坪井九馬三、内田銀蔵、久米邦武、吉田東伍、喜田貞吉ら、ひろい意味での「歴史地理学者」(Ⅰ―六)の著作や、せまい意味では地理学者

とはいえない内村鑑三(Ⅰ―三)、新渡戸稲造(Ⅰ―三)らの地理学的な著作にもおよんでいる。また、『地理と歴史』(地理歴史学会)はその全号の復刻が収められている(Ⅰ―七、八)。本選集に収録された文献の多くは、現在では所蔵機関の少なさと資料の材質上の劣化などのため、しだいに閲覧が不便になりつつあるものである。その不便さの解消に資するものとして、本選集刊行の意義はきわめて大きい。

さて、本選集は一八八九年から一九〇七年までの文献をⅠ(全九巻、「近代地理学の成立前夜」)に収め、一九〇八年から一九二五年までの文献をⅡ(全八巻、「近代地理学の形成」)に収めているのであるが、この時代区分と文献の取捨選択は、当然のことながら、編者の地理学史観にもとづくものである。Ⅰ、Ⅱそれぞれに付された「解説」によれば、編者が一八八九年、一九〇七年、一九二五年をそれぞれ地理学史上の画期とみなすのは、それらの年に、近代地理学成立を考えるうえで重要なできごとがあつたからであるという。順に、『地学雑誌』(地学会)創刊、日本最初の地理学講座設置(京都帝国大学文科大学)、日

本地理学会の成立の年である。ただし、これら三つのできごとに限らず、いくつもの重要なできごとが同年あるいはその前後の年に起こっているという。こうした編者の地理学史像については、「解説」とともに、編者のこれまでの著書、すなわち、『近代日本地理学思想史』(一九九二年)、『日本地理学史論』(二〇〇〇年)、『地理学史』(二〇〇二年)においても表明されている。今回、明治・大正期のオリジナルな文献をひろい範囲にわたって収録した本選集の刊行により、編者はその地理学史像を、いつもの説得力をもって提示できたのではないだろうか。

また、本選集に収められた文献が、同時代のさまざまな文献のなかで、どのような位置を占めるのかについては、解説およびそれに付された「近代日本地理学文献年表」によって確認できるようになっている。また、小川琢治、小田内通敏、辻村太郎、牧口常三郎、三沢勝衛がおこなった研究については、上記の編者の著書のなかで、すでに論じられている。

最後に、現在でも地理学は、その性質上、人文科学・自然科学の双方にまたがる学問

領域であるが、その傾向は本選集の対象とする明治・大正期にはよりいっそう顕著であった。そのことは上述のとおり、本選集に収録された論文等の著者がせまい意味での地理学者のみにとどまらない点にも表れているのであるが、いっぽう、せまい意味

での地理学者たちの著作にも、歴史学、農学、地質学、地形学など隣接諸分野の成果を撰取した跡が随所にみられる。その意味では、本選集は単に「地理学文献選集」という規定のみにはおさまりきれず、いわば近代日本における知的営みの軌跡の一面を

照射しうる性格をも有している。本選集をひろく学界に紹介せんとする所以である。

(A5判 二〇〇七年五月・八月 クレス出版
縮定価Ⅰ 税別九万円、Ⅱ 税別九万四千円)

(柴田陽一 京都大学大学院文学研究科・院生、日本学
術振興会特別研究員)